

開催日：2000年10月18日（水）

会 場：神奈川大学人文学研究所資料室
（17号館216号室）

講演者：広瀬友久氏（大妻女子大学教授）

演 題：「イギリス・ロマン主義の自然観」

ロマン主義は近代化批判として理解することができる。すなわちロマン主義は、近代における無際限な欲望の拡大に対して、コントロールする機能を果たすのである。

イギリス・ロマン派のコウルリッジは、階層秩序の崩壊した近代という時代のなかで、新たに個と普遍、有限と無限の媒介という問題を立てたのだった。それは彼によって「構想力」として考えられている。彼の言う「構想力」は、無限な宇宙理性と個人の有限な理性をつなぐ飛躍として理解することができる。それを担うのがシンボルであって、なかでも最高のシンボルが詩である。ロマン主義はこうした美的なシンボルによって、有限から無限への飛躍をなそうとする。近代的な理性では、このような飛躍は生まれえない。

ロマン主義の芸術家には、自然から自分を遠ざけ、内面へと向かうという志向がある。それでも自分の孤独な内面に、内的な自然、すなわち生命を見出すのである。こうしてロマン主義は、孤独のなかで自然と一体となり、自然のなかに永遠の真理を発見しようとする。それはアルプスのような自然における崇高な美であり、近代のなかで失われた神に代わる自然の無限性である。こうしてロマン主義は、自然の崇高さを眼前にして、近代的な個人を無際限な欲望から解放し、近代化にたいする異議申し立てを遂行しようとしたのである。

＊

広瀬氏のこのような研究発表は、文学的であるとともに、哲学的でもあり、ドイツ・ロマン主義との対比をする上でも興味深い問題を投げ掛けていただいた。ロマン主義の自然観の比較研究という方向で、今後とも共同研究を進めてゆきたい。

（伊坂青司記）